

D区第60・63号住居跡 (第486図～第491図)

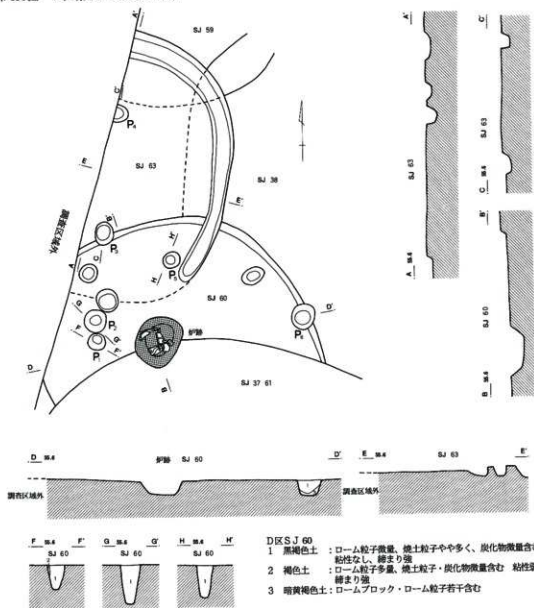
C-18区に所在する。調査区壁際で、2軒切りあった状態で検出された。新旧関係は不明である。

D区第60号住居跡

北東コーナーが調査区域外に存在する。第61号住居跡を切っているが、この部分の壁・床面は検出できなかった。第38・63号住居跡とも切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

楕円形の住居跡であると思われ、長径は不明、短径

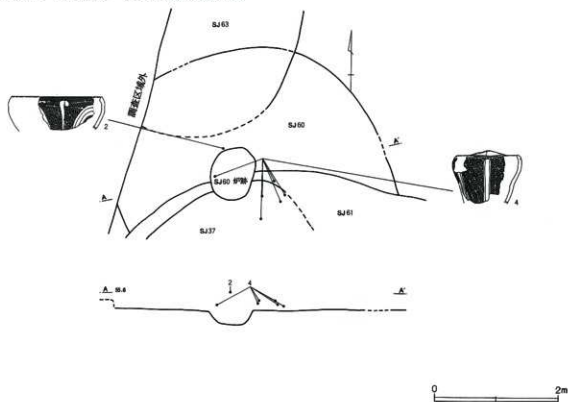
第486図 D区第60・63号住居跡



約4.4m、主軸方向はN-20°-Wを指す。壁高は20cmで、切り合い関係にある第63号住居跡床面と本住居跡床面との比高差は約8cmである。床面は平坦で、南西に向かって緩やかに傾斜している。壁溝は検出できなかった。

炉跡は主軸線上に所在し、ほぼ床面中央に位置するものと思われる。同一個体に属する土器の大型破片を立て並べて直径40cm強の円形の区画を構築するもので、土器片囲炉である。

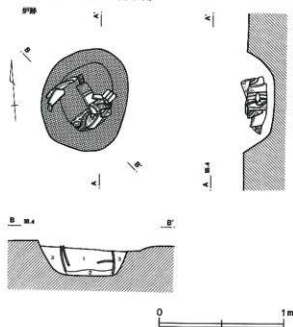
第487図 D区第60・63号住居跡遺物分布図



土器片は外側にローム混じりの黒褐色土を充填して固定されている。伊跡の掘り方は長径80cm、短径68cm、深さ25cmの不整形円形のピットである。

床面上からは7本のピットが検出された。第63号等

第488図 D区第60号住居跡伊跡



別の遺構に伴うものも含まれるものとみられる。

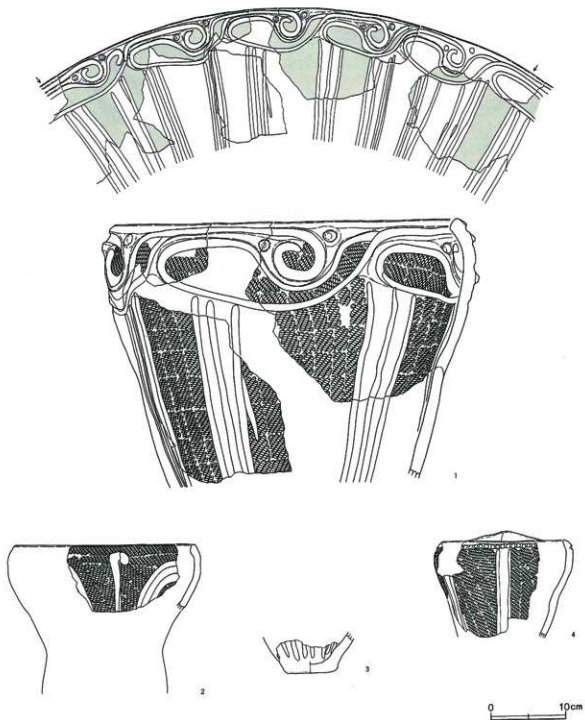
伊体土器以外に、覆土中から復元個体を含む縄文時代中期末葉の土器が出土している。



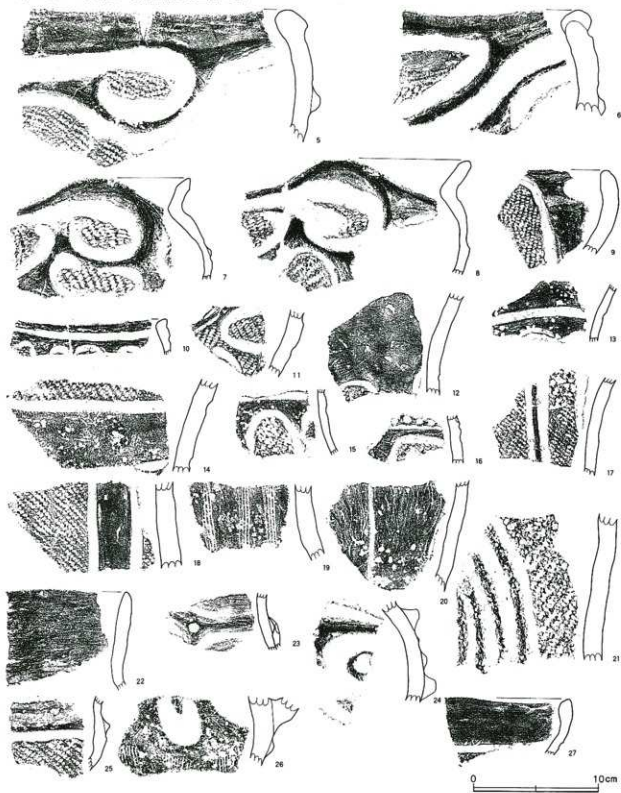
D区S J 60 伊跡

- 1 黒褐色土：焼土粒子少量含む
- 2 黒褐色土：焼土ブロック少量、
焼土粒子多量、炭
化物少量含む 締
まり強
- 3 黒褐色土：ローム粒子多量、
焼土粒子少量含む

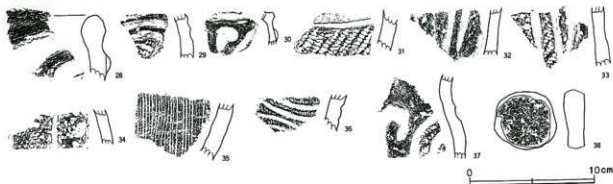
第489图 D区第60号住居跡出土土器(1)



第490图 D区第60号住居跡出土土器(2)



第491図 D区第60号住居跡出土土器(3)



出土土器(第489図・第490図)

1は炉材として、破片の状態 で用いられていた土器である。口縁から胴部中段にかけて残存し、互いに接点を持たないいくつかの部分に分かれて出土した。

比較的大型のキャリバー類深鉢である。口縁部文様帯は、隆帯+沈線による入り組み状の渦巻モチーフが描かれ、隆帯の末端や交点には指頭状の工具による円形の刺突が施される。文様帯の下端は幅広の沈線によって区画される。胴部には3本一組の沈線による磨消し懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文である。口径45cm、現存高34cmを測る。

2は吉井城山願の深鉢口縁部である。水平口縁で、口縁下に縦位のわらび手状沈線が描かれる。胴上半部に平行沈線による逆U字状の区画が描かれ、沈線間の地文が磨消される。地文はRL単節の縄文である。

3は深鉢底部である。懸垂文末端の集合沈線が垂下する。地文はみられない。底径6.3cmを測る。4は深鉢口縁から胴上半部である。水平口縁で、一か所が隆起して小突起を形成するものとみられる。口縁直下に1条の沈線が巡り、内部に棒状工具先端の刺突が施される。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。口径15.8cm、現存高14.7cmを測る。

5~8はキャリバー類の深鉢口縁部である。5・6は水平口縁、7・8は波状口縁である。5は両側に沈線によるなぞりを加えた隆帯で渦巻文が描かれる。6は二本隆帯による波状の区画が描かれる。7・8は波頂部に隆帯+沈線による渦巻文が描かれる。渦巻文の

左右及び下方にはC字条の沈線による区画が描かれ、内部に縄文が充填される。11は類似の文様が描かれる深鉢頸部である。

9は逆U字状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。10は口縁直下に1条の沈線が巡り、胴上半部に楕円ないし逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。12~14は無文帯を有する深鉢頸部である。13・14は胴部との境に1条の沈線が巡る。15は胴部中段に1条の沈線が巡り、胴下半部に逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。16は胴部中段に列点文を伴う平行沈線が巡る。17・18は磨消し懸垂文の胴部である。21は三本隆帯で渦巻文が描かれる。

22~26は両耳壺である。22は口縁部、23~25は胴上半部の文様帯である。26は橋梁状の把手である。

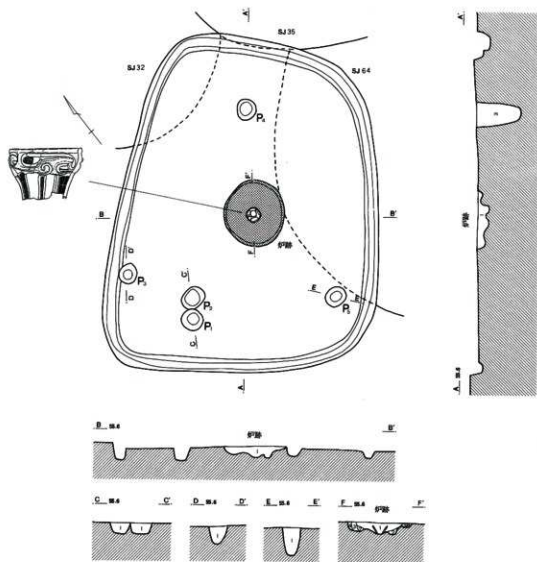
D区第63号住居跡

西半部が調査区域外に存在する。第59号住居跡に切られる。第38・60・61号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。円形ないし楕円形の住居跡であると思われるが、正確な規模・平面形・主軸方向は不明である。壁は残存せず、壁溝だけが検出された。炉跡は検出されなかった。

出土土器(第491図)

第60号住居跡出土遺物として取り上げられたが、第63号住居跡に属する可能性のあるもので、壁溝からの出土が中心である。28~34はキャリバー類の深鉢である。36は連弧土器、37は広口壺の肩部である。38は土製円盤である。

第492図 D区第62号住居跡



D区SJ62

1 暗褐色土：ロームブロック若干、ローム粒子少量、炭化物微量含む

D区SJ62炉跡

1 暗褐色土：ロームブロック若干、焼土粒子・炭化物少量含む

2 暗褐色土：ロームブロック多量、焼土ブロック少量、焼土粒子若干、炭化物少量含む

3 黄褐色土：再堆積ローム

4 暗黄褐色土：ロームブロック・ローム粒子多量含む

0 2m

D区第62号住居跡（第492図～第495図）

E-16、E・F-17区に所在する。第32号住居跡に切られ、第64・65号住居跡等とも重複するが、新旧関係は不明である。

南西方向に広がる隅丸台形の住居跡で、長径5.2m、短径4.2mを測る。主軸方向はN-43°-Eを指す。壁高は残りのよい部分で8cmを測る。壁溝は床面上を1巡し、重複はみられない。

炉跡は床面中央部に所在する。胴下半部を欠く深鉢

を正位に埋設する埋燗炉であるが、炉全体の規模に比べ土器のサイズが小さく、炉体土器というよりは支脚の性格を持つものと思われる。

炉跡の掘り方は直径1mの円形のビットで、底面は不整で深さ18cmを測る。

床面上からは5本のビットが検出されている。これらのうち南及び西のコーナーと、炉跡奥壁側で検出されたP3・4・5は主柱穴と考えられる。深さは30～70cmを測る。

前述の埴体土器のほかに覆土中から縄文時代中期後葉を中心とした土器が出土している。

出土土器（第494図・第495図）

1は埴体土器である。キャリバー類の小型深鉢で、口縁の一部と胴部中段から下を欠失している。水平口縁で、口縁部に隆帯+沈線の渦巻文が展開する。胴部には幅広い磨消し懸垂文が垂下する。地文はLR単節の縄文である。口径13.2cm、現存高12.4cmを測る。

2は小型深鉢の口縁部である。水平口縁で、口縁直下に二本隆帯が巡り、隆帯間に両端わらび手状の沈線が描かれる。この沈線は口縁状を1巡するが、モチーフ末端の一方が立ち上がって突起を形成する。胴部には半裁竹管状工具による縦位の条線が施文される。

3はキャリバー類深鉢の底部から胴下半部である。磨消し懸垂文が垂下し、地文部に蛇行沈線が垂下する。地文はRLR複節の縄文である。底径6cm、現存高

13.6cmを測る。

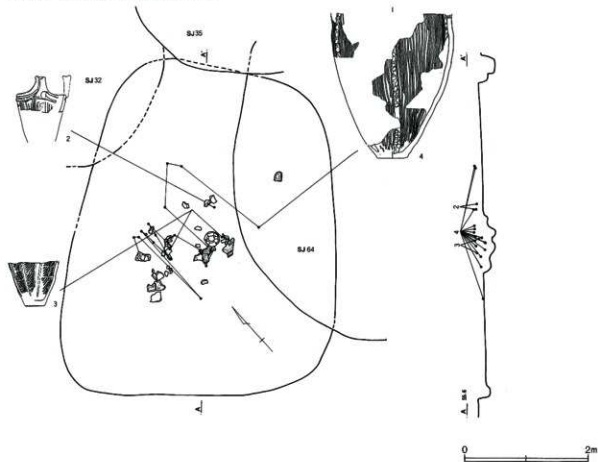
4は曾利系の隆帯土器で、紡錘形の胴部である。交互刺突風の刻みを伴う縦位の隆帯が垂下する。地文は縦位の集合沈線である。現存高38.5cmを測る。

5は浅鉢で、口縁から胴下半部にかけて残存する。水平口縁下に無文帯が存在する。胴部との境には断面三角形の隆帯が巡る。胴部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。現存高23.2cmを測る。

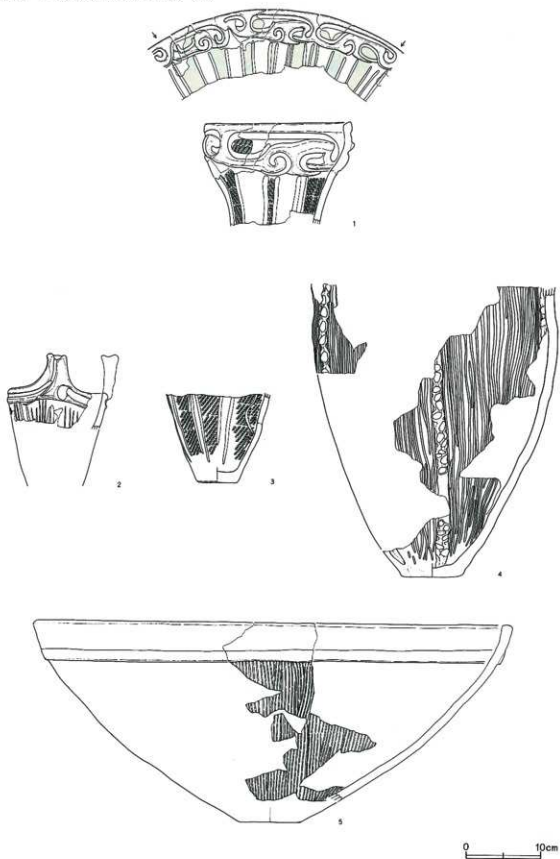
6～8はキャリバー類の深鉢である。6は頸部無文帯が存在する。7は二本隆帯により繫弧文が描かれ、繫弧モチーフの交点に受け口状の突起が付される。頸部には無文帯が存在する。8は渦巻文の両側に楕円形の区画が描かれ、胴部には磨消し懸垂文が垂下する。

9・10は連弧文系の土器である。9は口縁下に刺突列を伴う平行沈線が巡り、胴上半部には二本沈線の連弧文が描かれる。10は磨消し連弧文である。

第493図 D区第62号住居跡遺物分布図



第494图 D区第62号住居跡出土土器(1)



11は玉泡き文が描かれる深鉢口縁部で、口端上に縦長の把手が付される。12は曾利系の深鉢口縁部で、半裁竹管状工具による条線が施文される。

13は一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する胴部である。地文は縦位の燃糸文である。14は蛇行沈線が描かれる胴部である。地文は半裁竹管状工具の条線である。15は連弧文系の深鉢胴部であろう。直線的に開く胴上半部で、四本沈線の波状モチーフが描かれる。

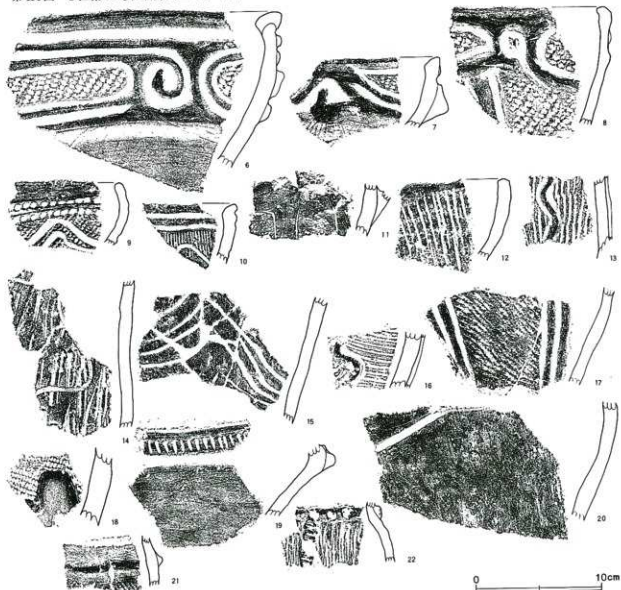
16は唐草文系の深鉢胴下半部である。一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下し、両側に半裁竹管状工具による弧状の集合沈線が施文される。17は三本沈線の磨消し懸垂

文が垂下する胴下半部である。

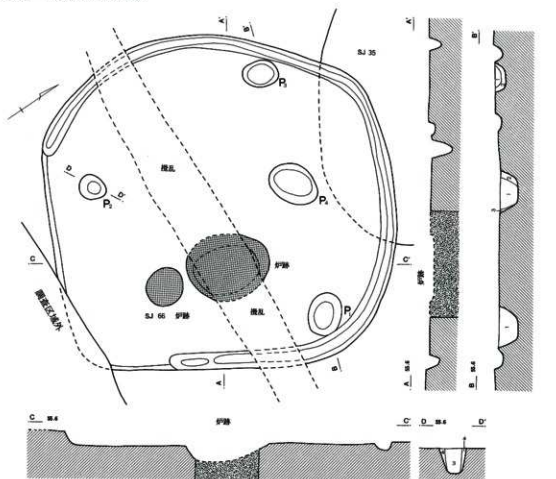
18は微隆起線による磨消しモチーフである。19は胴上半部に文様帯を持つ浅鉢である。胴部中段がくの字に張り出し、刻みを伴う1条の隆帯が巡る。胴下半部は無文である。21は上下になぞりを加えた断面三角形の隆帯が巡る。両耳壺の胴上半部であろう。

22は曾利系の隆帯文土器である。頸部に1条の隆帯が巡り、これを起点として胴部に縦位の隆帯が垂下する。隆帯上には櫛歯状工具の条線が横位に施され、竹管状工具による円形の刺突が施される。地文は櫛歯状工具による縦位の条線である。

第495図 D区第62号住居跡出土土器(2)



第496図 D区第64号住居跡



D区S J 64

- 1 黒褐色土 : ローム粒子・炭化物微量含む 粘性強、締まり強
- 2 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 粘性強、締まり強
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子多量含む 粘性強、締まり強
- 4 暗黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む



D区第64号住居跡 (第496図～第498図)

E・F-16・17に所在する。第66号住居跡に切られている。第35・62号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。不整な隅丸方形の住居跡で、直径5.5m、壁高は21cmを測る。主軸方向はN-59°-Wを指

第497図 D区第64号住居跡出土土器 (1)



す。

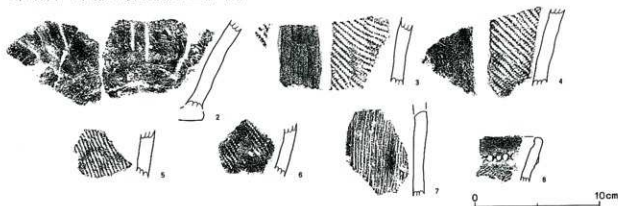
壁溝は南壁と東壁の一部で検出されなかったが、それ以外では切れ目なしに1巡する。炉跡は主軸線上南東壁寄りに位置している。中央をトレンチャーの攪乱に切られているが、直径1mの大型の地床炉であったものと思われる。床面から4本のピットが検出されたが、配置に規則性がみられず、本住居跡の柱穴配置は不明である。

遺物は中期末葉の土器が出土している。

出土土器 (第497図・第498図)

1はキャリバー類深鉢の胴下半部である。磨消し懸垂文が垂下し、地文はLR単節の縄文が縦位回転で施文される。2は深鉢胴下半部である。平行沈線の懸垂

第498図 D区第64号住居跡出土土器(2)

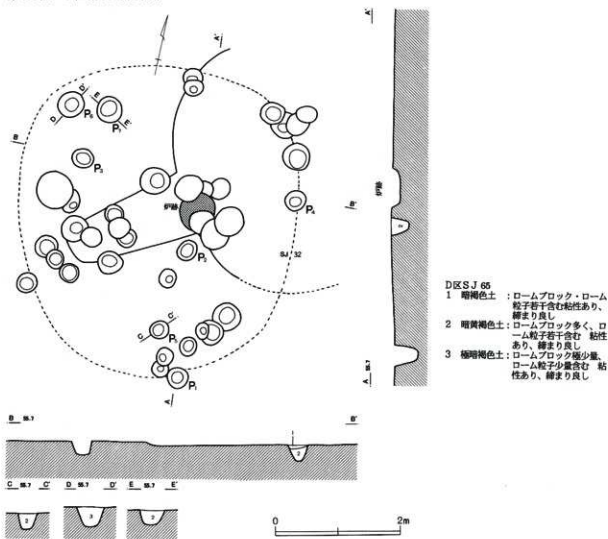


文が垂下する。3・4は磨消し懸垂文の胴部である。5・6は縄文、7は縦位の条線のみが施文される破片である。8は紐線文の巡る後期前葉の口縁で、覆土中への混入であろう。

D区第65号住居跡(第499図)

E-17区に所在する。第32号住居跡に切られており、第62号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。大小のピットが長径5m、短径4.5mの範囲に集中す

第499図 D区第65号住居跡



るものである。壁・壁溝は残存せず、規模・平面形・主軸方向は不明である。直径55cm、深さ13cmの円形の地床炉をピット群中央東寄りに検出した。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

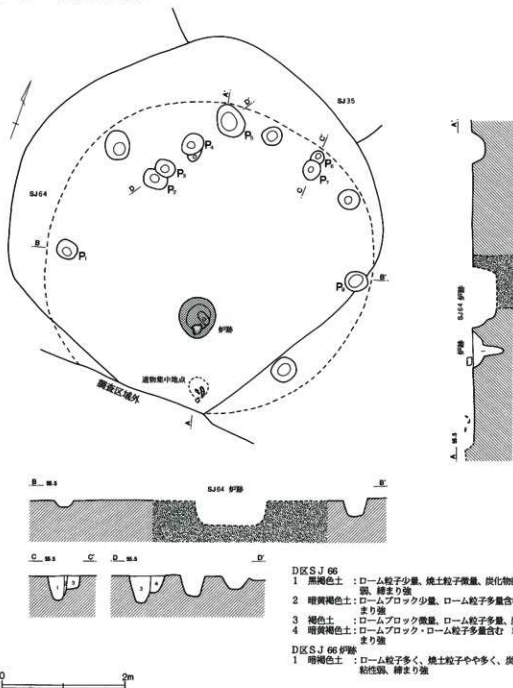
D区第66号住居跡 (第500図・第501図)

F-16・17区に所在する。第64号住居跡を切る。同住居跡床面上に炉跡と、直径約5.2mの環状のピット群を検出した。壁・壁溝は残存せず、本来の床面は第500図 D区第66号住居跡

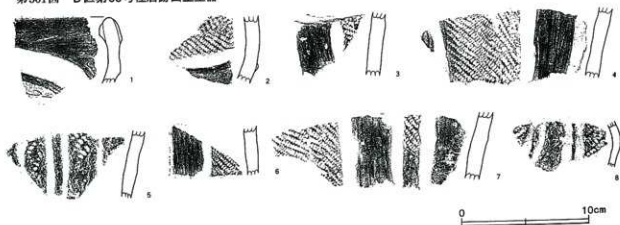
64号住居跡の覆土中に存在したと思われる。

炉跡は円形の地床炉で、直径63cm、深さ14cmを測る。中央に柱穴状の小ピットを伴っており、炉床面からの深さは33cmである。

炉跡の南西に十数点の土器片が集中する地点が確認された。当初炉跡に対応する埋蹠かと思われたが、接合不能な破片の集積であった。遺物集中地点と命名し、本住居跡に伴うものと考えたが、むしろ第64号住居跡



第501図 D区第66号住居跡出土土器



に属するものである可能性もある。

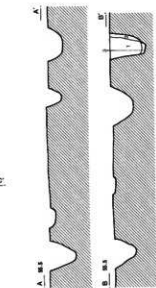
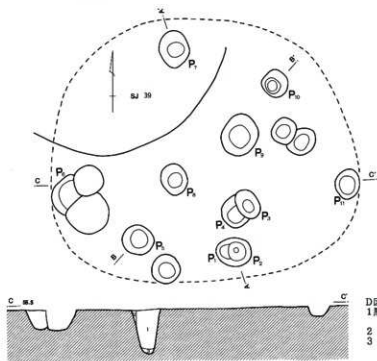
出土土器 (第501図)

1~7はキャリバー類の深鉢で、施文原体の異なる5以外は同一個体に属するものであろう。8は微隆起線による磨消しモチーフが描かれる。

D区第68号住居跡 (第502図)

E・F-18区に所在する。第39号住居跡と重複する

第502図 D区第68号住居跡



D区S J 68

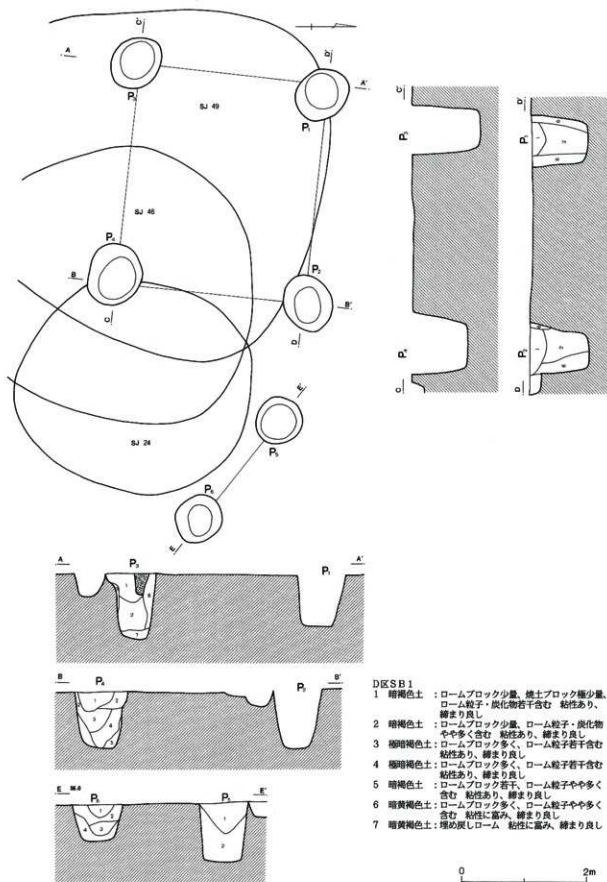
- 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、炭化物少量、焼土粒子微量含む 粘性あり、締まりあり
- 2 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性に富み、締まりあり

が、新旧関係は不明である。

大小のピットが長径4.3m、短径4mの範囲に集中するものである。壁は残存せず、壁溝も検出されなかったため、本住居跡の規模・平面形・主軸方向等一切不明である。ピットの配置は不規則で、複数の遺構の重複である可能性もある。灰層は検出されなかった。

本住居跡に伴う遺物は出土していない。

第503図 D区第1号掘立柱建物跡



DESB1

- 1 暗褐色土 : ロームブロック少量、雄土ブロック極少量、ローム粒子・炭化物若干含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗褐色土 : ロームブロック少量、ローム粒子・炭化物やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 3 極暗褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 4 極暗褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 5 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし
- 6 暗黄褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子やや多く含む 粘性に富み、締まりよし
- 7 暗黄褐色土 : 埋め戻しローム 粘性に富み、締まりよし

0 2m

(2) 掘立柱建物跡

D区第1号掘立柱建物跡 (第503図)

D区から検出された唯一の掘立柱建物跡である。周辺は中期末葉を中心とする住居跡の密集地域であり、本建物跡は遺構の切り合いの間隙を縫って検出された。本来さらに多くの建物跡が存在した可能性も無しとはいえないが、本建物跡に関わる柱穴は、恐らく図示した6本で全てであると思われる。

D・E-17・18区に所在する。第24・46・49号住居跡等と重複するが、新旧関係は不明である。

4本の柱穴が長辺3.5m、短辺3mの長方形に並ぶもので、主軸方向はN-85°-Wを指す。柱穴の検出面からの深さは0.9-1.03mを測る。柱穴の重複は観察されない。

4本の柱穴それぞれについて、北西のものをP1、北東のものをP2、南西のものをP3、南東のものをP4と命名した。P1の土層断面上に柱痕らしきものを検出した。直径は、検出面で50cm、底面付近で30cmを測る。むろん、これが柱材本来の直径を正確に反映するものとは言い切れまい。

本建物跡の東側側において、さらに2本の柱穴を検出、建物跡本体に近いものから巡りにP5・P6と命名した。両者ともに、P1-P2、P3-P4のいずれの軸線上にも乗っていない。柱穴の中心間の距離は約2m、軸線はN-50.5°-Wを指す。P5と最も近いP2の各中心間の距離は1.9mである。

当初、P5-P6を一方の襖とする別個の掘立柱建物跡が存在するものと考え、残りの柱穴の発見に努めたが、ついにこの2本以外の柱穴を検出できなかった。たった2本の柱穴からなる遺構を、独立した「建物」の名で呼ぶことには疑問があったため、これを4本柱の建物の襖側に付随する構造物と考えて同じくD区第1号掘立柱建物跡の柱穴群の一部とした。

その建築構造上の意味については、周辺地域における同時期の掘立柱建物跡に関する資料の増加を待つしかないだろう。

本建物跡から時期特定可能な遺物は出土しなかった。

(3) 土壌

D区からは42基の土壌が検出された。分布は調査区域のほぼ全域に及んでいるが、17-19ラインの住居跡密集地域において特に密であり、また、住居跡の分布が途切れる20・21ラインにおいても、東西方向への帯状の分布がみられる。

時期的には縄文時代中期後葉から末葉の土器が出土しており、これは住居跡群の時期とも一致している。

土壌の形態としては、円形プランで、壁が垂直に近い角度で立ち上がる一群と、これとは対照的に、長楕円形や隅丸長方形で、壁の立ち上がりが比較的緩やかな一群が存在している。形態と所属時期の関係については一概に言えないが、前者で特に掘り込みの深いものには中期後葉、後者には中期末葉の遺物を出土する例が目立つ。

底面に特殊な施設を伴う例はみられない。小ピットを伴う例については、ほとんどが別個の遺構との重複と考えていだろう。覆土中層に集石を持つ例が一件のみ確認された。

土壌の機能には墓塚、貯蔵穴等が考えられるが、遺構の密集する区域ではそれ以外に、掘立柱建物を構成する柱穴を土壌として、単体で記録している可能性もある。

個別の土壌の計測値などは後段の表を参照していただくとして、ここでは特徴的なものについて記載することとする。

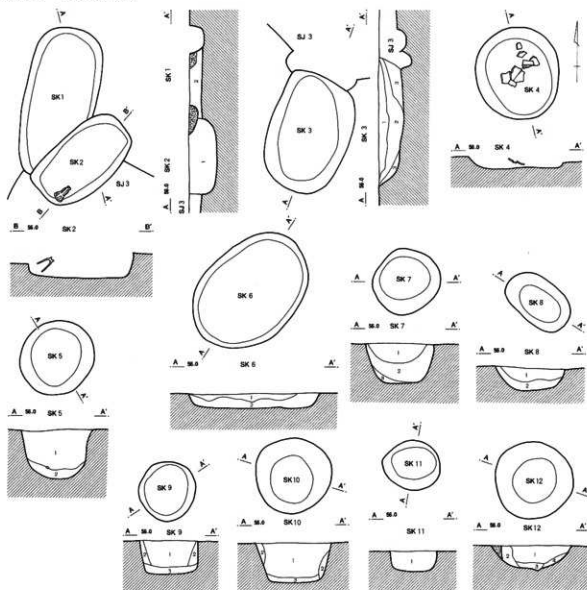
第1・2号土壌 (第504図)

C-22・23区に所在する。長楕円形の土壌で、2基がわずかに主軸方向をずらして切り合っている。第1号土壌は長径2.4m、深さ20cm、第2号土壌は長径1.6m、深さ44cm。新旧関係は、後者が前者を切っている。第2号土壌の南西端からは完形の台付き深鉢が逆位で出土している。遺物の時期は中期末葉である。

第15号土壌 (第505図)

D-18区に所在する。不整な隅丸方形で、長径1.2m、短径1m、深さ40cmを測る。第11・12号住居跡を切っている。

第504図 D区土壌(1)



DKSK 1 - 2

- 1 暗黄褐色土 : ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性あり、堅く締まっている
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロックやや多く含む 粘性あり、締まり良好し

DKSK 3

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック少量含む
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む
- 3 暗黄褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多く、焼土粒子極少量含む 粘性あり、締まり良好し

D区SK 6

- 1 黄褐色土 : ローム粒子少量含む
- 2 暗褐色土 : ローム粒子若干含む

DKSK 6

- 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、炭化物少量含む 粘性あり、締まり弱
- 2 褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック少量含む 粘性あり、締まりあり

DKSK 7

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック少量、炭化物若干含む 粘性あり、締まり良好し
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック多く、炭化物極少量含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、炭化物若干含む 粘性あり、締まりあり

D区SK 8

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干含む 粘性あり 締まり良好し
- 2 暗褐色土 : ロームブロック、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まり良好し

D区SK 9

- 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、焼土粒子、炭化物微量含む 締まり弱
- 2 暗褐色土 : ロームを主体に1層が混入、締まり弱
- 3 暗黄褐色土 : ロームを主体に1層が固状に混入、締まりやや強

D区SK 10

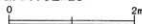
- 1 黒褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量を含む 締まりあり
- 2 褐色土 : ソフトローム多量を含む
- 3 暗褐色土 : ロームブロック、ソフトローム多量を含む 締まりあり

DKSK 11

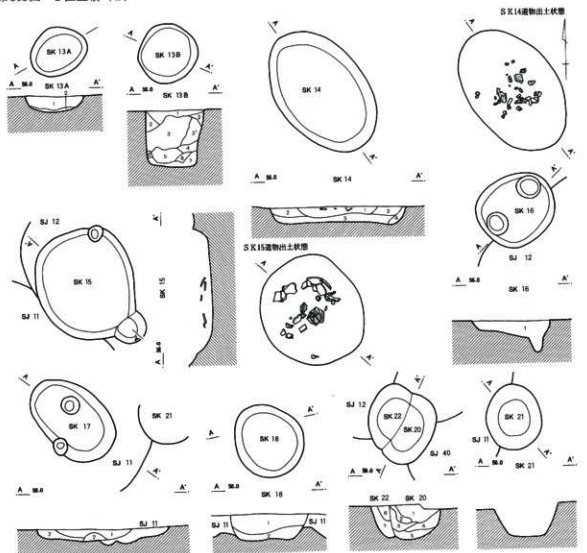
- 1 暗褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量を含む 締まりあり

D区SK 12

- 1 暗褐色土 : ローム粒子多量、ロームブロック少量含む
- 2 暗褐色土 : ソフトローム、ロームブロック多量を含む
- 3 暗褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量、炭化物微量含む
- 4 暗褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量を含む



第505図 D区土壌(2)



D区 SK 13 A

1 暗褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量に含む 締まりあり

2 褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量に含む

D区 SK 13 B

1 極暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まりよし

2 極暗褐色土 : ロームブロック、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まりよし

3 極暗褐色土 : ロームブロック、焼土ブロック若干含む 大型遺物・鏝が出土 粘性あり、締まりよし

3' 極暗褐色土 : 3層中ローム粒子、ロームブロックを多く含む部分

4 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし

5 黒褐色土 : ロームブロック、炭化物若干含む 粘性あり、締まりよし

6 極暗褐色土 : ロームブロック多く含む 粘性あり、締まりあり

7 暗黄褐色土 : ローム粒子、ロームブロックやや多く含む 粘性に富み、締まりよし

D区 SK 14

1 黒褐色土 : ローム粒子、炭化物少量含む 締まりよし

2 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり弱

3 暗褐色土 : ローム粒子、ロームブロック多量、炭化物少量含む

4 黄褐色土 : ロームブロック・ローム粒子多量含む 壁崩落土

D区 SK 16

1 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まりよし

D区 SK 17

1 暗褐色土 : ロームブロック少量、黄白色火山灰極少量含む 粘性あり、締まりよし

2 暗褐色土 : ロームブロック、ローム粒子多量に含む 粘性あり、堅く締まっている

D区 SK 18

1 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし

2 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、焼土ブロック・炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし

D区 SK 20・22

1 極暗褐色土 : ロームブロック少量、炭化物極少量含む 粘性あり、締まりよし

2 極暗褐色土 : ロームブロック若干、炭化物おと少量含む 粘性あり、締まりよし

3 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、炭化物極少量含む 粘性あり、締まりよし

4 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし

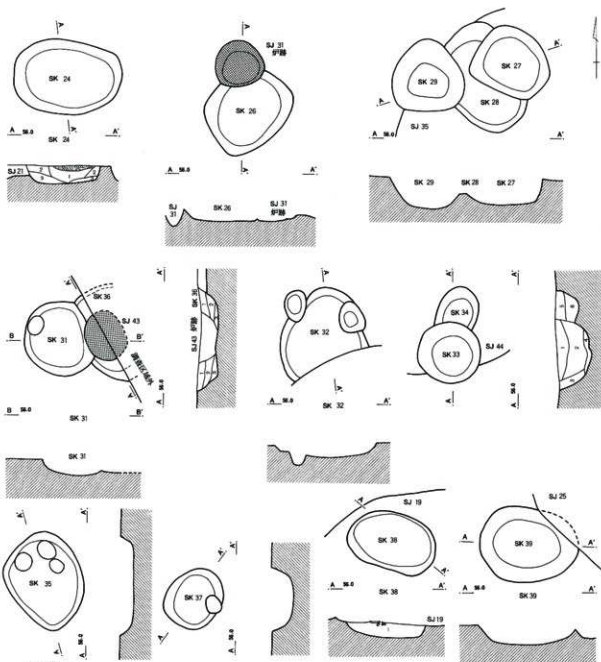
5 暗褐色土 : ロームブロック、ローム粒子、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし

6 暗黄褐色土 : ロームブロック、ローム粒子多く含む 粘性に富み、締まりよし

7 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、炭化物極少量含む 粘性あり、締まりよし



第506図 D区土壌(3)



D区SK 24

- 1 暗黄褐色土：ローム粒子若干含む 粘性あり、締まりよし
- 2 暗黄褐色土：ローム粒子多く、ロームブロック若干含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土：ローム粒子多く、ロームブロック若干含む 粘性あり、締まりよし

D区SK 33・34

- 1 黒褐色土：ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化物多量含む 粘性あり、締まりあり
- 2 暗褐色土：ローム粒子多量、ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土：ロームブロック、ローム粒子多量含む
- 4 褐色土：ロームブロック、ローム粒子多量含む 粘性に富む
- 5 暗褐色土：ローム粒子多量含む 粘性あり、締まりよし
- 6 暗黄褐色土：ローム粒子・ロームブロック多量含む

D区SK 36

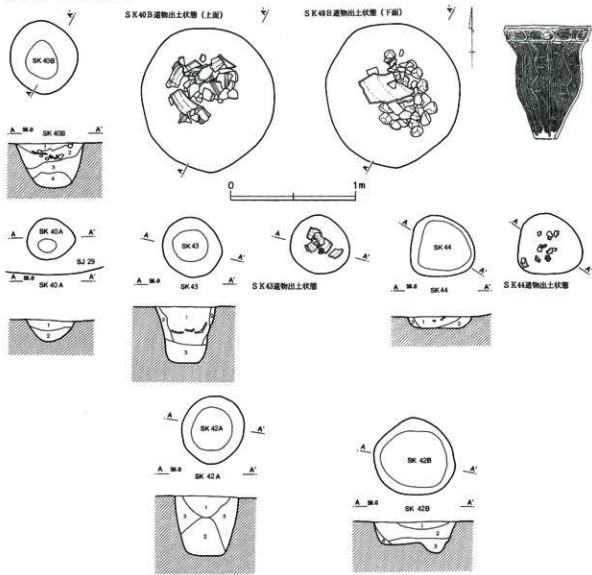
- 1 黒褐色土：ローム粒子多く含む
- 2 暗褐色土：ローム粒子多量、ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性あり、締まりよし
- 3 暗褐色土：ローム粒子、ロームブロック多量を含む

D区SK 38

- 1 黒褐色土：ローム粒子多量、ロームブロック若干含む 締まりよし



第507図 D区土壌(4)



D区SK 40 A

- 1 暗褐色土 : ローム粒子多量、炭化物微量含む 締まり強
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック多量含む 粘性に富む

D区SK 40 B

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まり良し
- 2 暗黄褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子やや多く含む 粘性あり、締まり良し
- 3 極暗褐色土 : ロームブロック少量、炭化物極少量含む 粘性あり、締まり良し
- 4 極暗褐色土 : ロームブロック若干、焼土ブロック極少量含む 粘性あり、締まり良し

D区SK 42 A

- 1 暗褐色土 : ロームブロック少量含む 粘性あり 締まり良し
- 2 暗黄褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック少量含む 粘性あり 締まり良し
- 3 暗黄褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック少量含む 粘性あり、締まり良し

D区SK 42 B

- 1 暗褐色土 : ロームブロック若干、ローム粒子少量含む 粘性あり 締まり良し
- 2 暗褐色土 : ロームブロックやや多く、ローム粒子若干含む 粘性あり 締まり良し
- 3 暗黄褐色土 : ローム粒子多く、ロームブロックやや多く含む 粘性あり 締まり良し
- 4 暗黄褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック若干含む 粘性あり 締まり良し

D区SK 43

- 1 極暗褐色土 : ロームブロックやや多く、焼土ブロック極少量、炭化物少量含む 粘性あり 締まり良し
- 2 暗黄褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック若干、炭化物少量含む 粘性あり、締まり良し
- 3 暗黄褐色土 : ロームブロック多く、ローム粒子やや多く、炭化物少量含む 粘性あり、締まり良し

D区SK 44

- 1 暗褐色土 : ローム粒子やや多く、ロームブロック少量含む 粘性あり、締まり良し 多量の遺物出土
- 2 暗黄褐色土 : ローム粒子極めて多く含む 粘性に富み、締まり良し

0 2m

名 称	图版番号	所 在	长径 (m)	短径 (m)	深度 (m)	主軸方向	遺物图版
S K 1	第504图	C-23,C-22	2.40	(1.10)	0.20	N-115° -E	
S K 2	第504图	C-22,C-23	1.66	0.95	0.44	N-49° -E	第508图
S K 3	第504图	C-22	1.85	1.30	0.40	N-175° -E	
S K 4	第504图	V-24	1.45	1.35	0.20	N-13° -W	第508,512图
S K 5	第504图	B-22	1.20	1.15	0.80	N-11° -E	第508,512图
S K 6	第504图	D-19,E-19	2.10	1.50	0.24	N-44° -E	第508,512图
S K 7	第504图	A-21,B-21	1.10	1.05	0.65	N-90° -E	第512图
S K 8	第504图	B-21	1.15	0.70	0.35	N-505° -W	
S K 9	第504图	V-22	0.95	0.90	0.52	N-55° -E	
S K 10	第504图	B-21	1.25	1.20	0.63	N-57° -W	
S K 11	第504图	U-23	0.90	0.80	0.31	N-875° -E	
S K 12	第504图	A-21,B-21	1.25	1.20	0.40	N-725° -W	
S K 13A	第505图	V-21	0.95	0.75	0.25	N-67° -E	第512图
S K 13B	第505图	C-21	0.95	0.90	0.90	N-235° -E	第512图
S K 14	第505图	D-19,E-19	2.15	1.40	0.30	N-34° -W	第508,512,513图
S K 15	第505图	C-18	(1.75)	1.55	0.35	N-11° -W	第509,513图
S K 16	第505图	D-19	1.25	1.10	0.50	N-625° -E	第513图
S K 17	第505图	E-18	1.55	1.00	0.43	N-465° -W	第513图
S K 18	第505图	D-18	1.20	1.05	0.40	N-41° -W	第513图
S K 19		不明					第510图
S K 20	第505图	E-18	1.04	-	0.55	N-29° -E	第513图
S K 21	第505图	E-18	1.03	0.89	0.50	N-35° -W	第513图
S K 22	第505图	E-18	1.05	-	0.50	N-165° -E	
S K 24	第506图	E-18	1.70	1.10	0.30	N-875° -W	第510,513图
S K 26	第506图	E-18,F-18	1.42	1.13	0.15	N-635° -E	第513图
S K 27	第506图	F-17	1.20	1.00	0.40	N-5° -W	第513图
S K 28	第506图	F-17	1.76	-	0.30	N-195° -W	第513图
S K 29	第506图	F-17	1.15	1.15	0.50	N-73° -W	
S K 31	第506图	F-18	1.17	0.95	0.20	N-3° -W	第510,514图
S K 32	第506图	D-18	1.15	1.55	0.35	N-6° -W	第514图
S K 33	第506图	F-17	1.00	0.95	0.55	N-665° -W	第514图
S K 34	第506图	F-17	-	0.60	0.34	N-21° -E	
S K 35	第506图	F-17	1.60	1.20	0.20	N-8° -W	第514图
S K 36	第506图	F-18	1.05	-	0.25	N-295° -W	第514图
S K 37	第506图	F-18	1.00	0.85	0.35	N-315° -E	
S K 38	第506图	E-19	1.40	0.90	0.25	N-685° -W	第510,514图
S K 39	第506图	F-18	(1.60)	1.18	0.30	N-865° -W	第514图
S K 40A	第507图	E-17	0.80	0.65	0.35	N-84° -E	
S K 40B	第507图	C-19D-19C,20D-20	1.15	1.05	0.70	0	第510图
S K 42A	第507图	C-21	1.05	0.95	0.93	N-18° -E	第514图
S K 42B	第507图	C-21,D-21	1.30	1.20	0.50	N-78° -W	第514图
S K 43	第507图	D-20,D-21	0.95	0.85	0.90	N-37° -W	第511图
S K 44	第507图	D-20	1.05	1.00	0.20	N-44° -W	第514图

覆土中から4個体分の土器の大型破片が出土したが、これらの土器片は一部が小口立てをなし、隅丸方形のプラン内部に北東-南西に主軸を持つ楕円形の小区画をつくり出しているように見える。区画の規模は、長径約1.1m、短径約60cmを測る。土器の時期は中期末葉である。

第40B号土壙 (第507図)

C・D-19・20区に所在する。直径1.15m、深さ70cmを測る。本土壙は覆土中層に集石を伴う。これは10～15cm大の円礫を、中央のくぼんだ皿状に敷き並べたもので、上面には大型深鉢1個体分の土器片をやはり面的に敷き並べている。土器はその場でつぶれたというよりは他の場所で破砕されたものを持ち込んだもののように、一部は礫の隙間にも差し込まれていた。土壙の底面から集石面までは約45cm、集石上下の覆土はロームブロックが目立ち、人為的な埋め戻しを思わせる堆積状態ではあった。

第43号土壙 (第507図)

D-20・21区に所在する。直径約90cm、深さ90cmの不整形の土壙である。覆土中層から深鉢胴下半部が破砕された状態で出土した。

第2号土壙出土土器 (第508図1)

第508図1は付けき深鉢である。水平口縁で、口縁下に1条の沈線が巡る。胴上半部にはU字状の磨消しモチーフが連続して描かれる。胴下半部には逆U字状の磨消しモチーフが描かれ、胴上半部の文様と対向している。

口縁下の沈線は一方所で切れ目を生じ、ここから緩やかなS字を描く1条の隆帯が胴中段まで垂下する。器台部は3方向に円形の貫通孔が開けられている。

口径12cm、器台部を含む器高は24cmを測る。

第4号土壙出土土器 (第508図2・第512図1・2)

第508図2は水平口縁で、胴下半部から口縁部まで一本調子に開く円筒形の深鉢である。逆U字状の磨消しモチーフが描かれ、無文部にはわらび手状の沈線が垂下する。地文はL R単節の縄文が施文される。口径25.5cm、現存高27.2cmを測る。

第512図1・2は磨消し懸垂文が垂下する。

第5号土壙出土土器 (第508図3・第512図3～8)

第508図3は付けき土器の器台部である。表裏2面に隆帯および平行沈線による台形の区画が描かれ、区画中央に円形の貫通孔がみられる。地文は施文されない。現存高6.3cmを測る。

第512図3は隆帯懸垂文の垂下する胴部で、地文は縦位の燃糸文である。5は地文縄文上に隆帯懸垂文が垂下する。6は半裁竹管状工具の平行沈線により蛇行懸垂文が描かれる。7は連弧文土器である。

第6号土壙出土土器 (第508図4・第512図9～23)

第508図4は水平口縁の深鉢で、同一個体に属する口縁と胴中段の破片が別々に出土した。口縁直下に1条の沈線が巡り、胴上半部には鋸歯状の磨消しモチーフが描かれる。胴下半部には逆V字状の磨消しモチーフが描かれる。地文はL無節の縄文である。

第512図9は磨消し縄文の玉抱き文が描かれる口縁部である。10は断面台形の隆帯が垂下する口縁部である。11は断面三角形の隆帯が巡る口縁部である。12は磨消し縄文による曲線モチーフの一部である。15～20は磨消し懸垂文の胴部である。

21は横位の平行沈線が巡る胴中段で、胴下半部には逆U字状の区画が描かれる。地文は樹歯状工具による縦位の条線である。

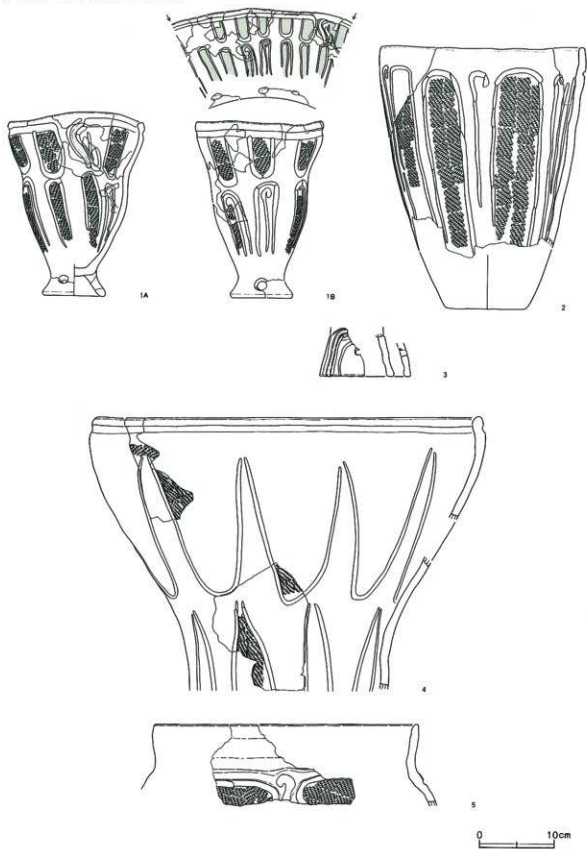
第7号土壙出土土器 (第512図24～26)

24はキャリバー類の深鉢口縁部である。口縁下に断面三角形の隆帯によって横楕円形の区画が描かれる。地文は篋状工具による斜位の集合沈線である。25は二重口縁の深鉢である。26は平行沈線の連弧文が描かれる深鉢胴部で、一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。

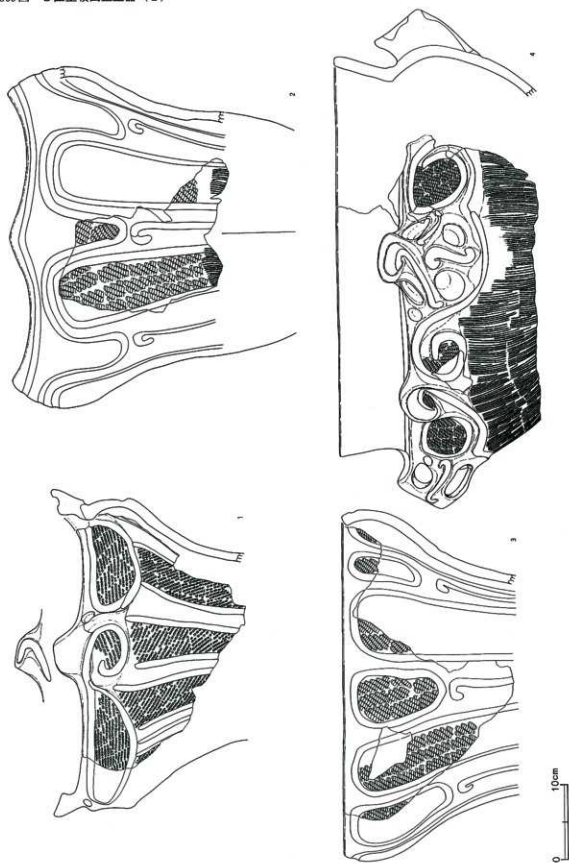
第13号土壙出土土器 (第512図27～34)

27は2本一組の微隆起線による磨消しモチーフが描かれる口縁部である。28は断面三角形の隆帯によって横楕円形の区画が描かれ、内部に縦位の集合沈線が充填される。29は一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下し、左右に弧状の集合沈線が施文される。30は弧状の集合沈線のみがみられる。32は三本沈線の懸垂文が垂下する胴

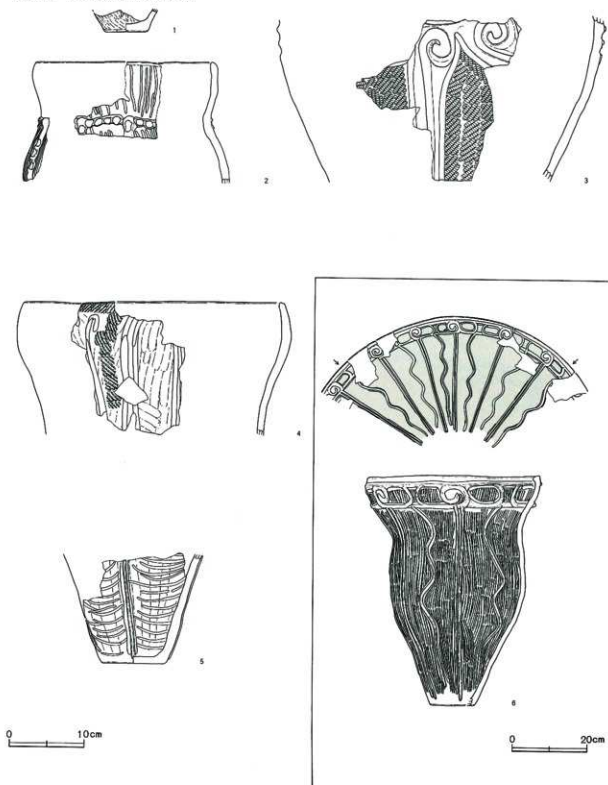
第508图 D区土坑出土土器(1)



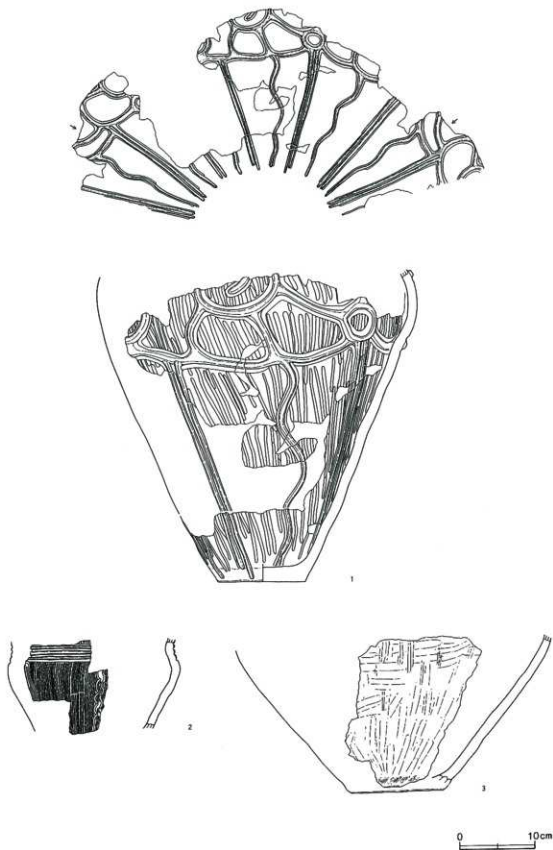
第509图 D区土壩出土土器(2)



第510图 D区土壙出土土器(3)



第511图 D区土填出土器(4)



下半部で、地文は縦位の集合沈線である。33は連弧文系の胴部である。

第14号土壇出土土器（第508図5・第512図35～41・第513図1）

第508図5は広口壺の口縁部から胴上半部である。比較的短い無文の口縁部が垂直に近い角度で立ち上がり、頸部に1条の隆帯が巡って段をなす。胴部には磨消し懸垂文が垂下して、無文部にわらび手状の沈線が描かれる。地文はR L単節の縄文が充填施文される。

第512図35・36はキャリバー類深鉢口縁部である。35は波状口縁、36は水平口縁である。36は同類の口縁部文様帯下端で、頸部には縦位の条線が描かれる。37は逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。39～41は磨消し懸垂文の胴部である。第513図1は広口壺の肩部である。

第15号土壇出土土器（第509図・第513図2・3）

第509図1はキャリバー類の深鉢で、口縁から胴部中段にかけて残存する。波状口縁で口端上に台形の突起が付され、突起背面に単沈線の渦巻文が描かれる。口縁部文様帯は隆帯+沈線によって渦巻文と楕円形の区画が描かれる。胴部には磨消し懸垂文が描かれる。地文はL R L複節の縄文である。

2は吉井城山類で、胴部上段から中段にかけて残存する。Y字状の磨消し懸垂文が垂下し、無文部にわらび手状の沈線が描かれる。胴上半部の地文はR L単節の縄文、胴下半部の地文は櫛歯状工具の条線である。

3は水平口縁の深鉢で、口縁部から胴部中段にかけて残存する。胴上半部には楕円形と逆U字状の磨消しモチーフが交互に描かれる。

4は両耳壺のバリエーションで、いわば「四耳壺」であろうか。胴上半部に4単位の中空把手が配され、間隙には隆帯+沈線により渦巻文と楕円形の区画が交互に描かれる。把手部分を除いた復元最大径55cm、現存高26.7cmを測る。

第513図2は磨消し懸垂文の胴部、3は縦位の条線のみ破片である。

第16号土壇出土土器（第513図4～7）

4はわらび手状の沈線の末端である。5は磨消し懸垂文である。

第17号土壇出土土器（第513図8～12）

8は連弧文土器の口縁部である。9は無文の口縁部である。10は微隆起線文の胴部、11は磨消し懸垂文である。12は無文の浅鉢底部である。

第18号土壇出土土器（第513図13～15）

13は磨消し懸垂文の曲線モチーフが描かれる胴部である。14は磨消し懸垂文が垂下し、地文部に蛇行沈線が垂下する。15は櫛歯状工具による縦位の条線が描かれる。

第19号土壇出土土器（第510図1）

第510図1は深鉢底部である。懸垂文末端の沈線がみられ、斜位から横位の研磨が施される。

第20号土壇出土土器（第513図16～19）

16は内湾する口縁部で、斜位の沈線が観察される。17は口縁部文様帯下端の隆帯である。18は磨消し縄文による曲線モチーフである。19は磨消し懸垂文の垂下する胴部である。

第21号土壇出土土器（第513図20）

逆U字状の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。地文はR L単節の縄文がモチーフに沿って充填される。

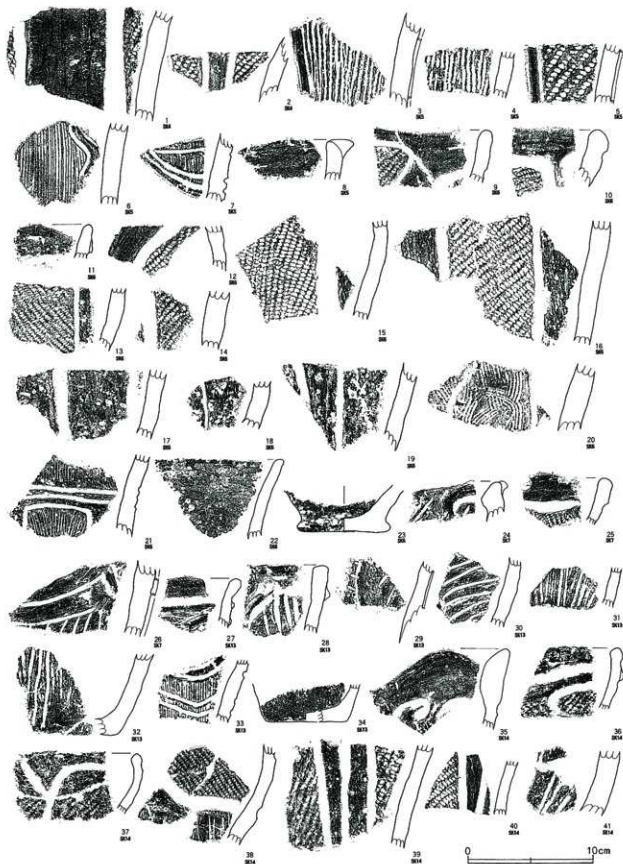
第24号土壇出土土器（第510図2・5・第513図21～23）

第510図2は曾利系の隆帯土器である。紡錘形の胴部に貧弱な口縁部が付されるもので、口縁から胴部中段にかけて断片的に出土している。指頭の押捺を伴う隆帯で器面を縦横に分割する。地文は縦位の集合沈線である。

第510図5は唐草文系の深鉢胴下半部である。一本隆帯の懸垂文が垂下し、左右に弧状の集合沈線が描かれる。底径9.7cmを測る。

第513図21は連弧文土器の口縁部である。口縁下に刺突文を伴う平行沈線が巡り、胴上半部に三本沈線の連弧文が描かれる。22は曾利系の隆帯土器である。指頭押捺を伴う隆帯で器面を縦横に分割する。地文は

第512图 D区土壤出土土器(5)



第513图 D区土填出土器(6)



縦位の集合沈線である。23は磨消し懸垂文の垂下する胴部である。

第26号土壇出土土器（第513図24～32）

24～26はキャリバー類深鉢の口縁部である。24は波状口縁で、山形突起内面にも渦巻文が描かれる。25は水平口縁で、隆帯＋沈線による横楕円形の区画が描かれる。胴部には磨消し懸垂文が描かれる。

27は頸部に1条の沈線が巡り、胴部には磨消し縄文によるアルファベット文が描かれる。28はわらび手状の沈線が描かれる。31は平行沈線の懸垂文が垂下し、左右に格子目状の沈線が描かれる。

第27号土壇出土土器（第513図33・34）

33は微隆起線による渦巻状の磨消しモチーフである。34は台付き深鉢の脚台部である。逆U字状の磨消しモチーフが描かれ、無文部にわらび手状の沈線が描かれる。

第28号土壇出土土器（第513図35・36）

35は磨消し懸垂文の垂下する胴部である。36はキャリバー類深鉢の頸部である。口縁部文様帯下端を扁平な隆帯により区画し、胴部には両側に幅広い沈線によるなぞりを伴う隆帯で大柄の渦巻文を描き、内部にR L単節の縄文が充填施文される。

第31号土壇出土土器（第510図3・第514図1～7）

第510図3は深鉢胴下半部である。隆帯＋沈線の渦巻文が横位に展開し、モチーフの接点から磨消し懸垂文が垂下する。地文はR L単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

第514図1は縄文のみ施文される口縁部である。2はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯であろう。3～5は磨消し縄文による曲線モチーフの胴部である。

6はキャリバー類深鉢の頸部である。胴部には磨消し懸垂文が垂下する。7は磨消し懸垂文の胴部である。

第32号土壇出土土器（第514図8～11）

8は磨消し懸垂文の胴部である。9は単沈線の懸垂文が垂下する胴部である。10は逆U字の沈線が描かれる胴部である。11は浅鉢の頸部であろう。横位の沈線が巡り、胴部に縦位の条線が描かれる。

第33号土壇出土土器（第514図12～15）

12はキャリバー類深鉢の口縁部である。13は口縁下に1条の沈線が巡る。14はわらび手状の沈線が垂下する。15は間に凹線のなぞりを伴う2本一組の隆帯が垂下する。

第35号土壇出土土器（第514図16・17）

16は無文地に微隆起線文の描かれるもので、ひさご形土器の胴部であろう。17は横位の沈線がめぐり、縦位の条線が施文される。

第36号土壇出土土器（第514図18）

キャリバー類深鉢の口縁部である。波状口縁だが、波頂部の突起が欠落する。隆帯＋沈線による渦巻文が描かれ、円形の刺突が施される。

第38号土壇出土土器（第510図4・第514図19）

第510図4は水平口縁の深鉢で、平行沈線による逆U字状の磨消しモチーフが描かれ、わらび手状の沈線が垂下する。地文はL無節の縄文である。

第514図19はキャリバー類深鉢の口縁部である。波頂部に隆帯＋沈線の渦巻文が描かれ、内面にも渦巻文が描かれる。

第39号土壇出土土器（第514図20・21）

20はキャリバー類深鉢の口縁部文様帯である。21は磨消し懸垂文が垂下するもので、頸部付近の破片である。

第40号土壇出土土器（第510図6）

第510図6はキャリバー類の深鉢である。底面と口縁の一部が欠失する。口縁部文様帯は上下を隆帯によって区画する区画内部に隆帯渦巻文が描かれ、対弧状の隆帯によって楕円形の区画が構成される。頸部無文帯は存在せず、胴部に一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。地文は櫛歯状工具による条線である。口径44cm、器高60cmを測る。

第42号土壇出土土器（第514図22～28）

22は水平口縁の深鉢口縁部である。口縁下に1条の沈線が巡り、重丸文が施文される。23は深鉢頸部で、二本隆帯の区画が巡る。

24は隆帯による唐草文が描かれる深鉢胴上半部である。25・26も唐草文系の土器で、斜位の集合沈線を地

第514图 D区土横出土器(7)



文とする。

第43号土壇出土土器 (第511図1~3)

第511図1は唐草文系の深鉢で、頸部から上を欠失する。胴上半部には両側に沈線のなぞりを伴う隆帯によって渦巻文が描かれ、文様帯下端は横位の隆帯によって相互に連絡される。

胴下半部には二本隆帯の懸垂文と一本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。地文は棒状工具の集合沈線が充填施文される。底径11cm現存高39.8cmを測る。

2は深鉢胴部である。胴部中段にくびれを持ち、半截竹管状工具の平行沈線が3段巡る。胴下半部には同一工具によるコンパス文風の蛇行懸垂文が垂下する。

3は無文の浅鉢胴部である。

第44号土壇出土土器 (第514図29~33)

29・30はキャリバー類深鉢の口縁部である。31は断面三角形の隆帯による磨消し懸垂文が垂下する。32は隆帯+沈線による渦巻き文が描かれる。33は磨消し懸垂文が垂下する胴下半部である。

第515図 D区第1号配石遺構

(4) 配石遺構

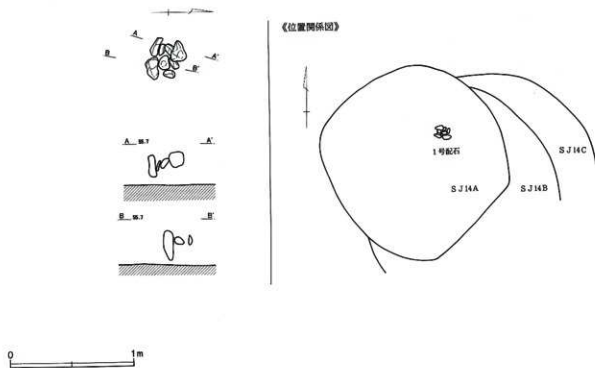
今回の調査を通して検出された石造の施設のうち、周囲にこれと組み合う伊跡・壁溝・柱穴や埋葬主体部となる土壇等が検出されず、住居跡や墓塚等の一部とは考えられないものを便宜的に配石遺構と呼称した。配石遺構は、今回の調査ではD区において1基のみ確認されている。

D区第1号配石遺構 (第515図)

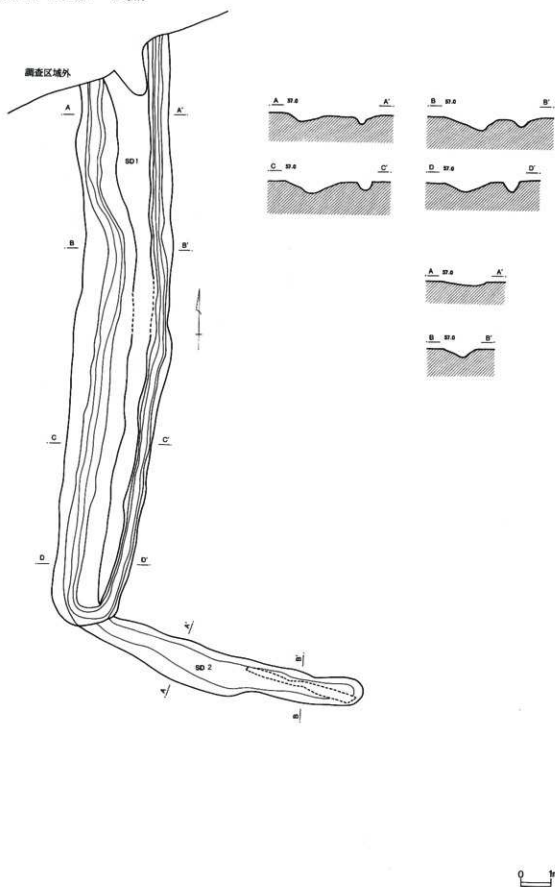
D-18区に所在し、第14A号住居跡の覆土を切っている。10~25cm大の長楕円形の礫を、主に長軸側を天地に向けたいわゆる長手立てにして、長径37cm・短径30cmの長方形に組み合わせたものである。主軸方向はN-79.5°-Wを指す。

周囲から土壇・埋葬等の施設は検出されなかった。下面に第14号住居跡に伴うピットが重複するが、同住居跡覆土中にこれに該当する切り合いは検出できなかったため、別個のものと考えた。

時期判定可能な遺物は出土していない。



第516图 D区第1·2号沟



(5) 溝

D区からは2条の溝が検出された。基本的にC区の溝跡群の延長である。性格としては道路の側溝、地割りなどが考えられる。

D区第1号溝(第516図)

A-23・24区に所在する。調査区北端部にはほぼ南北に走る溝で、位置関係からいってC区第15・16号溝の延長である可能性が高い。

調査区北壁から緩やかな菜研状の溝が2条並行して南下し、末端が約18.7mの地点でヘアピン状に連結している。溝は壁から10mまでほぼ真南に向かって延びているが、それより先ではわずかに西へと方向を変えている。

2条の溝が末端連結して区画をつくり出す構造は、C区第1号溝に類似しているが、溝の間隔は広いところでも1m強で、溝により区画されるスペースは著しく狭くなっている。

溝の幅は、並行して走る2本のうち東側のものが西側のものよりも狭いが、壁の立ち上がりは急峻になっている。東側部分の最大幅1.8m、深さ37cmを測る。西側部分の最大幅は87cm、深さ40cmを測る。

区画内部に何らかの施設が存在するのではないかと考えたが、攪乱が激しく、遺構らしきものは検出され

なかった。道路に伴う側溝である可能性が高いが、それにしては南端部分が閉塞してしまうという、一種不自然なあり方を示している。

遺物は縄文土器の小破片が若干出土した。これらは周田からの混入であろう。C区溝跡群からの連続ということを考えるなら、本溝跡は近世以降のものである可能性が高い。

D区第2号溝(第516図)

A・B-22・23区に所在する。第1号溝の南端から東南東方向に延びるごく浅い溝である。単独の溝で、これと並行して走る溝はみられない。第1号との新旧関係は不明で、同時期に機能していた可能性もある。

西端は第1号溝と連結し、東端は急速に浅くなって、B区中央付近で消滅しているが、これは攪乱や削平によるものであり、本来の溝はさらに東方へと続いていたものと思われる。

最大幅1.4m、深さ26cmを測る。壁の立ち上がりは全体に緩やかで、東端付近ではいくぶん急になっている。

覆土中からは縄文土器の小破片が若干出土したが、これらは周田からの混入である可能性が高い。第1号溝およびC区溝跡群からの連続ということ考えるなら、本溝跡の時期もまた近世以降に位置づけられよう。

(6) グリッド出土土器 (第517図～第520図)

1は小型深鉢で、口縁部から胴部中段にかけて残存する。水平口縁で、胴部中段にくびれを持ち、胴上半部は球状に張り出して内湾する。

口縁下に沈線などの区画が描かれず、口端直下から縄文が施文される。胴上半部に隆帯による波状の区画が巡り、波底部から胴下半部に向けて磨消し懸垂文が垂下する。隆帯の上下には沈線によるなぞりが加えられ、懸垂文は残存する範囲では左右に沈線等による区画を伴っていない。

特異な土器ではあるが、基本的に吉井城山類の文様構成を踏襲するものである。地文はR L単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

2も小型の深鉢で、胴上半部の破片である。沈線による玉抱き状の磨消しモチーフが描かれる。地文はL R単節の縄文が充填施文される。

3は深鉢胴下半部である。二本沈線による磨消し懸垂文が垂下し、胴部にR L単節の縄文が縦位回転で施文される。底部付近には縄文は施文されず、縦位の研磨が徹底される。

4は深鉢口縁部である。水平口縁で、口唇肥厚して内面稜をなす。口端直下から縄文が施文され、胴上半部には逆U字状の磨消しモチーフが描かれる。地文はR無節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

5は深鉢ないし両耳壺の胴部である。三本沈線の磨消し懸垂文が垂下し、地文はR L単節縦位回転の縄文である。胴下半部には斜位の研磨が徹底され、縄文がほとんど残存しない。

6は深鉢胴部の破片である。中段にくびれを持ち、ここを境に文様帯が上下に分帯される。胴下半部には逆V字の磨消しモチーフが描かれ、胴上半部からU字状の磨消しモチーフが2単位垂下する。これは何らかのアルファベット文の末端であると考えられる。地文はR L単節の縄文が充填施文される。

7は深鉢胴部中段の大破片である。二本沈線の磨消し懸垂文が垂下し、地文はR L単節の縄文が縦位回転で施文される。復元最大径22.3cmを測る。

8は後期初頭称名寺式の深鉢胴下半部である。スベード型の磨消しモチーフが描かれ、モチーフ下端を横位の沈線によって連結している。地文はL R単節の縄文が充填施文される。

比較的薄手の器面に彫りの深い沈線によって文様が描かれるため、器壁が内面ミミズ腫れ状に押し出されている。

9は織維土器である。波状口縁で、口端部がくの字に外屈する。頸部に1条の隆帯が巡り、波頂部から垂下する縦位の隆帯がこれと連結して、口縁下に方形の区画を構成する。区画内部には横位の荒い条痕が施文される。縄文時代早期末葉の土器であろう。

10～12は勝坂系の土器である。10は斜位の刻みを伴う隆帯によって渦巻文が描かれる口縁部である。口唇は肥厚し、口端上面が平坦に整形されて断面逆台形をなす。11・12は胴部破片である。平行沈線による三角形の区画文が描かれ、内部に三叉文や列点文、集合沈線文などが描かれる。

14～24はキャリバー類深鉢の口縁部である。14は二本隆帯によって横S字モチーフが描かれ、地文は横位の熱糸文が施文される。

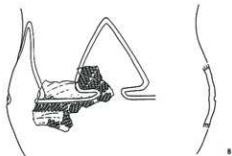
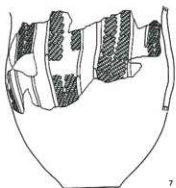
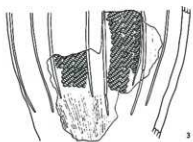
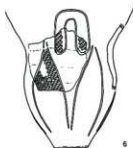
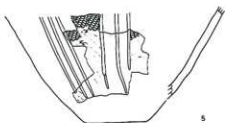
15～21は水平口縁である。口縁部には隆帯+沈線による渦巻文と楕円形の区画文が描かれる。16・17・20の胴部には磨消し懸垂文が垂下する。19は口端部が欠失する。渦巻文が弧状の隆帯によって横位に連結される繫弧風のモチーフが描かれる。

22～24は波状口縁である。22・24は波頂部直下に渦巻文が描かれる。23は渦巻文の脇に縦位のS字状沈線が描かれる。24は胴部に磨消し懸垂文が垂下する。

25は水平口縁条に三角形の突起が付されるもので、突起の直下に単沈線の紡錘文が描かれ、左右に隆帯による横楕円形の区画が描かれて、内部に縦位の平行沈線文が充填される。

26・29は連弧文土器の口縁部である。口縁下に平行沈線が巡り、沈線内部に棒状工具先端による刺列が施される。胴上半部には連弧文が描かれる。地文はいずれもR L単節の縄文である。13は胴部破片である。

第517図 D区グリッド出土土器(1)



第518図 D区グリッド出土土器(2)



0 10cm

第519図 D区グリッド出土土器(3)



0 10cm

三本沈線の連弧文が描かれ、地文は櫛歯状工具の条線が縦位に施文される。

27・28・30～33は逆U字の磨消しモチーフが描かれる口縁部である。30は鋸歯状のモチーフとの組み合わせで、玉抱き文の一部であろう。35は鋸歯状モチーフの上端が口縁下を巡る沈線と融合している。

37は梶山類である。断面三角形の隆帯により渦巻き状の磨消しモチーフが描かれる。地文はR L単節の縄文がモチーフに沿って充填施文される。

38は水平口縁の深鉢で、口縁下に上下になぞりを伴う断面台形の隆帯が巡る。胴部にはL R単節横位回転の縄文が施文される。

39は口縁下に1状の微隆起線が巡り、ここを境として口縁がくの字に内屈する。40も口縁下に微隆起線が巡り、口端との間に凹線のなぞりが加えられる。41は折り返し口縁である。

42は縄文のみ施文される口縁部である。水平口縁で、縦位のつまみ状の突起が配される。地文は繊細なL R単節の縄文で、口端直下では横位回転、それ以外では基本的に縦位回転で施文され、また、突起の両側にも施文される。

43は内湾する深鉢口縁部である。櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。口端部は肥厚し、内面に稜を形成する。

44・45はキャリパー類深鉢の頸部である。口縁部文様帯下端は幅広の沈線によって区画される。胴部には三本沈線の磨消し懸垂文が垂下する。地文はR L単節の縄文で、口縁部では横位回転、胴部では縦位回転で施文される。45は口縁部との境を扁平な隆帯によって区画し、磨消し懸垂文が垂下する。地文はL R単節縦位回転の縄文である。

46は断面三角形の隆帯による幅広の磨消し懸垂文が垂下する胴部である。47は磨消し懸垂文の一部が横位に連結されるH字文である。48は扁平な隆帯によるH字文である。

49はキャリパー類深鉢の頸部である。口縁部と頸部との境は上下に沈線のなぞりを伴う扁平な隆帯により

区画される。頸部には縄文が施され、胴部との境を1条の隆帯で区画する。胴部は無文で、逆U字状の磨消しモチーフやわらび手状の沈線が描かれるものと思われる。地文はR L単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。

50は微隆起線による磨消しモチーフである。比較的幅の狭い無文部が曲線的な文様を描く。地文はR L単節の縄文が縦位回転で施文される。51は平行沈線の懸垂文で、左右に鋭利な工具による矢羽根状の集合沈線が描かれる。52も同様の集合沈線が描かれる胴下半部である。

53は棒状工具の沈線により重弧文が描かれるもので、深鉢頸部付近の破片である。

54は深鉢頸部のくびれの部分で、横位の隆帯が巡る。隆帯上には指頭状の工具による圧痕が施される。55は深鉢胴下半部である。棒状工具の刻みが施される1条の隆帯が垂下し、左右に矢羽根状の集合沈線が施文される。

56～58は曾利系の隆帯文土器である。刻みを伴う隆帯が垂下し、地文は縦位の集合沈線である。57の隆帯には交互刺突風の刻みが施される。

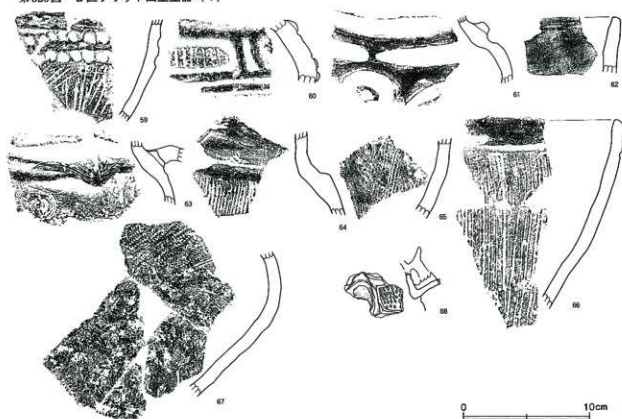
59は唐草文系の深鉢胴部である。指頭状の工具による円形の刺突列が2段に巡り、下方に渦巻文が描かれるものと思われる。地文は鋭利な工具による粗雑な集合沈線がモチーフに沿って充填施文される。

60は浅鉢胴上半部である。二本隆帯による直線的なモチーフが描かれる。隆帯上面には半截竹管状工具内面によるなぞりが加えられ、両側にも沈線によるなぞりが施される。地文は縦位の燃糸文である。

61は広口壺の肩部であろう。キャリパー類深鉢の口縁部文様帯に由来する渦巻文が描かれる。頸部との境には1条の隆帯が巡り、幅広の沈線によるなぞりが加えられる。

62は無文の口縁部である。水平口縁で、口端部が軽微に外反する。両耳壺に付随するものであろう。63・64は両耳壺の肩部である。63は橋梁状の把手の一部が残存する。頸部と胴部の境には1条の隆帯が巡り、段

第520図 D区グリッド出土土器(4)



を形成する。隆帯上には幅広い凹線のなぞりが加えられる。頸部は無文で、胴部には櫛歯状工具による小波状の条線が垂下する。

64は頸部との境に断面三角形の隆帯が巡って段を形成し、頸部は無文、胴部には櫛歯状工具の条線が施文される。

65は条線のみで、胴部である。66は浅鉢の口縁部から胴上半部で、口縁下に1条の沈線が巡り、胴部には櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。

67は浅鉢ないし深鉢の胴下半部であろう。中段が強く張り出して、上方で内湾する。縄文はRL単節縦位回転の縄文であるがごく浅い瓦痕で、張り出し部分から下には施文されない。

68は後期の注口土器の肩部と思われるものである。やや上向きの注口が付され、左右に隆帯による長方形の区画が描かれる。区画内部には鋭利な工具による刺突文が密集して施文される。注口の上部には橋梁状の把手が付される。

(7) 石器

先土器時代 (第521図)

1は第6号住居跡覆土中から出土したもので、ナイフ形石器である。基部は大部分を欠失するが、右側縁のみ裏面からの剥離調整がみられる。先端部は切出し状を呈し、鋭さを欠いている。

石材は粘板岩を使用する。

縄文時代 (第522図～第528図)

縄文時代の遺構覆土を中心に多数の石器が出土したが、完形品を中心に図示することとした。個別の資料の計測値等については後段の一覧表に委ね、ここでは特徴的なものについて記載する。

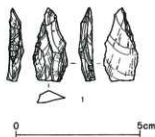
1は縄文時代草創期の有舌尖頭器である。先端部をわずかに欠損する。流線型の長大な身部が、直角に近い返しを経て、鈍角で詰まりの基部に至っている。身部の中間点付近の両側縁に軽微な抉りがつくり出されている。石材は黒色頁岩が用いられている。

石鏃は大半が凹基鏃で、これに少数の平基鏃が混じる。平基としたものには半粗製のものが含まれる。破損品も含め有茎の石鏃は全くと言っていいほどみられない。

A区においてみられたように、D区においても2・8・9・11・12・28といった粗大で肉厚な石鏃が目立って存在する。9・11は先端部の加工が徹底されず、断面も鈍角で、鋭利さを欠いている。12は肉厚で大柄の返しを持つもので、身部との境に抉りがみられ、先端部が欠損している。39も身部と返しとの間に抉りを持つもので、12に類似する。15は身部から先端部にかけて残存するが、大型の石鏃の軸部先端であるかもしれない。26は裏面中央に平坦な節理面を残しており、亀甲状の外形をもつ。32は五角形の身部で、基部がV字状に切れ込む特異な形態である。36はブーメラン状の長大な返しを持つ異形の石鏃である。同形のものがA区においても複数出土しており、この種の異形石鏃もある程度定型的に存在していたものと思われる。

石鏃は6点出土したが、完形品を中心に3点のみ掲載した。45は細長い軸部を持つもので、基部を欠損す

第521図 D区出土石器(1)



る。46は軸部の先端にまで調整剥離が施されており、つまみ状の基部を持たない軸部のみの石鏃である。良質のチャートを使用する。

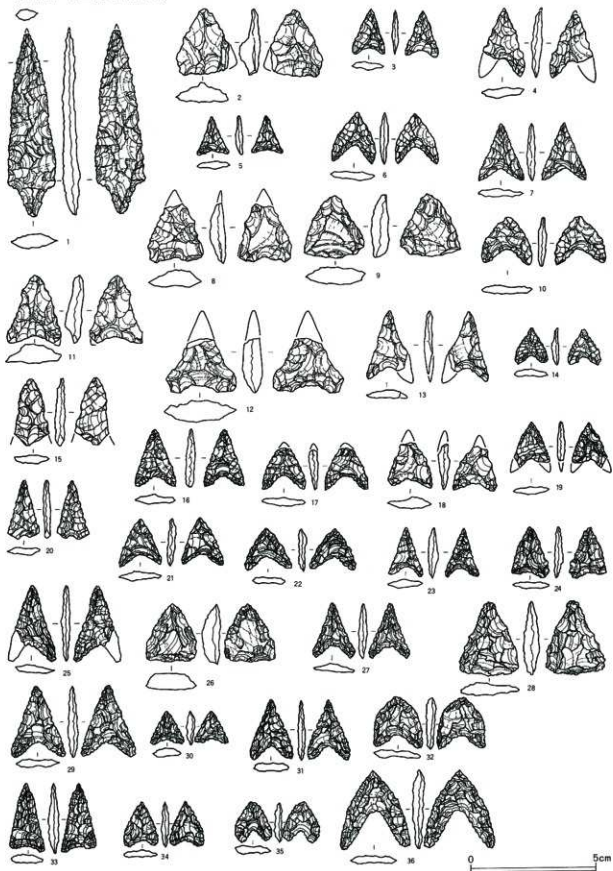
47は幅広い基部に、短い二等辺三角形の軸部が付される。横長の剥片を用いて作られており、背面に主要剥離面を残している。基部は左側縁のみ両面からの調整剥離が施され、軸部は左側縁が両面から、右側縁は表面からの調整剥離によって刃部がつくり出される。石材は黒色の安山岩である。

磨製石斧は定角型の精製のものと、半粗製のものが出土している。48は定角型の磨製石斧である。刃部が欠損した後、破断面に敲打整形が施され、ハンマーとして再利用されたものと思われる。打撃面には使用痕とみられる細かな剥離が観察される。49は定角型磨製石斧の刃部である。刃渡り9cmを越える大型の石斧であったものと思われるが、刃部の2/3を欠損する。残存する右側縁に明確な平坦面をつくり出しており、胴部断面三味線型を呈する。

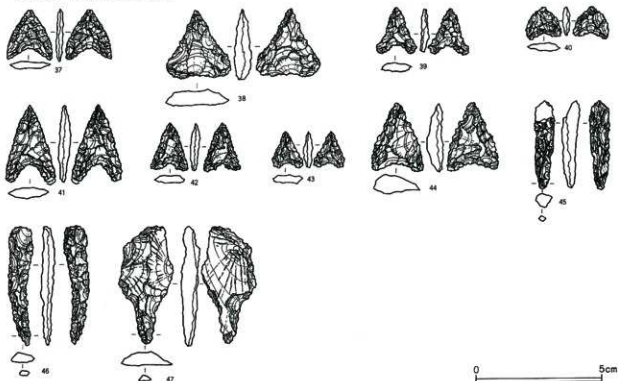
50は半粗製の磨製石斧である。敲打整形によって定角型の大まかなアウトラインを形成した後、刃部の方に研磨を施して、使用したものと思われる。刃部右側縁及び基部には使用時についたと思われる細かな剥離が観察される。

打製石斧は本区においても119点余りが出土しており、小破片まで含めると相当な数にのぼるものと思われる。形態の上では、やはり短冊形・撥形を主体とする。60は裏面に広く節理面を残しており、この裏面側からの加撃によって細長い船底形をつくり出している。原材の荒割りの段階を示すものと思われる。

第522图 D区出土石器(2)



第523図 D区出土石器(3)



55は基部末端に自然の礫面、左側縁に節理面を残すもので、このまま実用に供せないことはないが、やはり制作上上の状態を示すものであろう。

53・56・64・68等は基部末端に自然面を残すものである。胴部の挟りおよび刃部の形成等は終了しており、完成品であるものと思われる。

51・52・64・67は表面に自然面を残している。51は裏面に広く節理面を残しており、刃部の加工も徹底されていない。64は表裏ともに自然面を残している。67は表面に自然面、裏面に節理面を残している。基部が欠損するが、比較的整った整形を呈する。

54は刃部は断面鈍角で丸歯だが、基部は薄く水平で、両端が台形に張り出す。

61はやや中途半端な分削形を呈する。両側縁から表面にかけてベルト状につぶし加工がみられるのは、着柙時の安定を図ったものであろうか。

62は刃部が扇形に開く極端な整形を呈する。表面に自然面、裏面に節理面をそれぞれごく部分的に残している。原材の自然なカーブを生かしたためか、A区出

土のものに比べて湾曲が弱い。

石錐は3点出土した。漁網の重りとするならば、集落の規模や、台地の南北に河川を控えた立地からすると、出土点数があまりに少ないような気がするが、適当な大きさ・重さの礫であれば、挟入等の加工は必ずしも必要ではないものと思われる。重量は69が49g、70は57g、71は42gである。

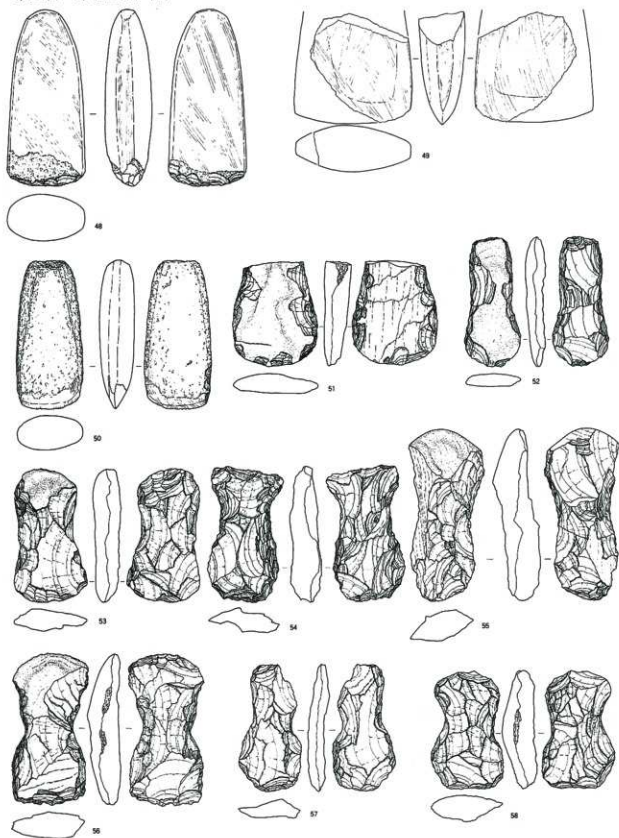
69・70は扁平な自然礫の両端に敲打によってスリットを形成するものである。70は細状のもの擦痕が剥離面を切っている。

71は表裏に研磨による平坦面がみられ、小型の磨石を転用したものと思われる。

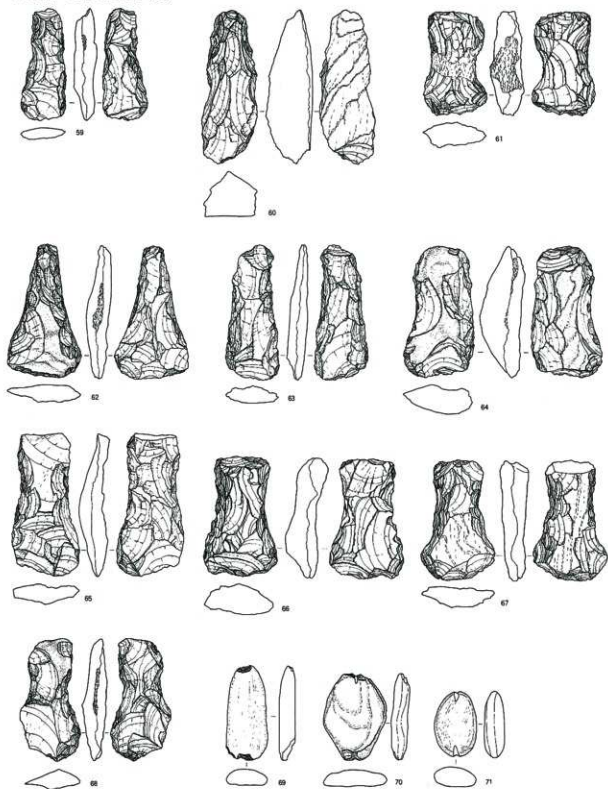
早期のスタンプ形石器に類似の敲打具は、D区においても多数出土している。スタンプ形石器を共存する撚糸文期の遺構・遺物は出土しておらず、これらの石器も中期に属するものと考えられる。

長軸側に2分割した長楕円礫の断面を使用面として、両側縁に細かな剥離を施して握りをつくり出すもので、礫の自然な形態を利用して最小限の敲打や剥離

第524图 D区出土石器(4)



第525图 D区出土石器(5)



0 10cm

第526图 D区出土石器(6)

